

野口眞氏の東アジア経済研究

名古屋大学大学院経済学研究科

附属国際経済動態研究センター 平川 均

[1] 野口さんとの出会い

野口眞さんとののはじめての出会い、1990年4月です。神奈川県茅ヶ崎市に新設された文教大学国際学部と同僚として、野口さんは北の秋田から、私は西の長崎から、それぞれ移籍して会うことになりました。国際学部の設置には、当時東京大学教授だった故森田桐郎先生と伊藤誠先生が関っており、設立3年後に森田先生も東大の定年退職と共にこの学部に移られることになっていました。私たち二人は森田先生と伊藤先生の推薦組みとして、この新設学部へ移籍したのでした。

ただ、私には事情があり、この学部の設置の1年前に文教大学情報学部に移籍し、新設学部の認可に関する仕事にも僅かながらも携わりながら、設置認可を待ちました。このとき、文教大学には私の知人は皆無でしたので、森田先生の、「野口君が来年4月には文教にやってくるよ」という言葉は、とても心強く待ち遠しいものでした。それで、90年4月に野口さんが初めて文教大学に姿を現わしたとき、もうすっかり以前から交際してきた真の仲間のように挨拶を交わしました。野口さんの事情も私と同じで、当時私以外に関係を持つ同僚はいなかったようなので、同じ気持ちだっただろうと思います。それ以来、私たちは同じ志をもつ以前からの友人のように付き合い、新しい学部の立ち上げに関わりました。

職場の同僚としてもっとも印象深い出来事は、野口さんが文教大学国際学部の初代入試委員長として、私が湘南キャンパス本部つきの入試部主任として、新設学部2年目の特別入学試験を突如しなければならなくなった時のことです。新設学部の苦渋の末の決定で入試を実施することになり、野口さんと私、そして入試課の職員は一緒になって入試方法や入試日程についての、殆ど前例のない判断をしました。入学式から逆算して諸々のスケジュールを決定したり、入試方法等を検討したりしましたが、彼は持ち前の適切かつ速やかなアイデアと判断力によってテキパキと課題を解決し、特別入試を成功させ、見事に難局を乗り切りました。この時の経験は、彼と私との間の研究領域以外での信頼関係を間違いなく強めたと思っています。その後、私たちはそれぞれ国際学部を離れて新しい職場に移り、研究者としての付き合いになりましたが、会うときは時間を越えて親しく話せる仲間になっていたように思います。

ですから、本日のシンポジウムでの報告者の方々のように、私の野口さんとの付き合いは10数年しかなく、それほど長くないのですが、彼と一緒にいたときの数々のほろ苦い場面さえ蘇っ

てきて、とにかくそうした同じ職場での出来事が研究者としての交流に加わって、彼への思いを一層強くしています。

[2] 野口理論と東アジア

1 アジアへの目覚め

私の専門はアジア経済論と思っています。特にアジア NIES の工業化を世界経済の枠組みの中から説明しようと努力してきました。1960 年代後半から韓国、台湾、香港、シンガポールのいわゆるアジア NIES が輸出主導型の工業化を通じて目覚ましい経済成長を始めますが、1985 年のプラザ合意による円高を契機に、成長の波は ASEAN、中国に広がりました。野口さんと私が会った 90 年代の初めの東アジアはそうした状況でしたので、ちょうど名著『現代資本主義と有効需要の理論』を 90 年 1 月に書き上げ、次のステップに進もうとされていた野口さんは、既存理論では理解できないこの成長に強い関心を示すことになったのだと思います。そのため、1993 年の春に、2 人で、急速な工業化で注目されていた香港とその後背地(深?、広州、珠海、マカオ)の珠江デルタ地帯と、更にシンガポール、マレーシアのジョホール、インドネシアのバタムからなる成長の三角地帯を、約 2 週間かけて回りました。珠江デルタの 1 週間の旅は、私のゼミに当時、大変優秀な留学生の朱寅君という学生がいましたので、彼を通訳にして回りました。

この 2 週間の旅は大変刺激的なものでした。毎晩、野口さんとその日訪問した企業のこと、そのほかその日の出来事や光景について感想を述べ、議論し合いました。どこまで車が走っても途切れることの無い大規模な工場やマンション群などの中国沿海部の開発のうねり、交通機関である公共バスさえやたらとスピードを出し、交通規則などまるで無いような運転など、その活力に圧倒されました。深? で訪ねた強力なシンナーの臭いに包まれた玩具工場、ジョホールの工業団地内の日系のエレクトロニクス企業でのインタビューなどを通じ、香港とシンガポールの 2 つの NIES の周辺で工業化が拡大している様を毎日確認したのでした。野口さんと私の対話は、こうした現状を確認しつつ次第に共通の見解に収斂していったことを覚えています。

私の印象ですが、野口さんはこの旅を契機に NIES、ASEAN、中国、すなわち東アジアの急速な工業化と成長に目覚めました。そして、この後、東アジアの成長や工業化に関する研究を精力的に始めました。この旅行の経験は、93 年の夏に、社会評論社の『月刊フォーラム』第 37 号に「激変のアジアは何処へ NIES、中国、日本資本」という題の論文になりました。ちなみに、私もアジア太平洋資料センター(PARC)の『オルタ』終刊号に「東アジアの工業化と日系多国籍企業」という題で論文を書きました。野口さんはそれ以降、より広い視野からアジア経済、中国社会主義、現代資本主義の現状分析を総合的、精力的に進めることになったと思います。

専修大学社会科学研究所が作成して下さった彼の著作リストから彼の現状分析に関する論文

を挙げてみますと、私の理解では 94 年 3 月に伊藤誠先生が代表者として組織された科研費補助研究の報告書で、論文「情報通信技術の革新と途上国開発」を書き、同じ月、『月刊フォーラム』では、座談会「市場経済化する社会主義・中国」に参加しています。96 年 2 月には『主体と状況』242 号で論文「東南アジア発展の要因と可能性」を發表します。97 年 2 月には『月刊フォーラム』で論文「開発理論の現在 その源流を考える」を、98 年 7 月には『アジア経済』に故森田桐郎先生の集大成『世界経済論の構図』の書評を、翌 99 年 2 月には東大経友会機関紙『経友』第 143 号に「中国の裏通りと表通り」を執筆しています。また、99 年 10 月には、伊藤誠先生編の『現代資本主義のダイナミズム』に「戦後世界システムの転換と中心・周辺関係の変容」を、そして 2000 年 3 月の降旗節雄先生と伊藤誠先生の共編『マルクス理論の再構築 - 宇野理論をどう生かすのか』では「アジア経済危機と現代資本主義のゆくえ」を發表しています。

この頃を思いますと、伊藤誠先生がマルクス経済学者として、市場経済化する中国社会主義に関心を強めたのと同じように、野口さんも中国社会主義に特別の関心を持っていたように思います。だから、『現代資本主義と有効需要の理論』で理論的に中間理論を考えした後、野口さんは情報化社会の進展する現代資本主義と社会主義の可能性に関心を拡大し、同時に世界経済の中心・周辺構造、急成長するアジア経済などにも研究の領域を広げていったのです。野口さんは理論家ですから、中間理論の研究を深めるためにも、この時期急速に現状分析に視野を広げるべきだと考えたのではないかと思います。

2 アジア通貨危機と野口開発経済論

1997 年 7 月に勃発したアジア通貨危機以後には、野口さんは通貨危機に関心を寄せます。この成果は、2000 年 9 月に法政大学比較経済研究所の研究会で發表された「アジア金融危機の政治経済モデル」となります。それが 01 年 3 月の進化経済学会の報告へ繋がっていきます。『進化経済学論集』第 5 集には論文「アジア金融危機と制度間摩擦」が發表されています。私もこの時期、アジア通貨危機に関心を持っていましたが、彼が逝った後に彼の論文を読んで、私とほとんど同じような研究をしていたことにびっくりしました。とりわけ、彼がアジア危機の理論整理をしていて、とても強い印象を受けました。

もっとも、その後の野口さんと私の研究関心と研究対象は対照的な方向に移っていきます。野口さんは、アジア危機を「金融危機」と捉えて、その危機の発生原因を解明しようとする。同時に、IMF や世界銀行が発展途上国に迫る構造調整に異議を唱え、歴史をみればたとえ共通の構造的圧力を受けても資本主義は地域的多様性を示してきたという事実を述べて、制度の多様性を強調していきます。そこから、進化経済学の成果を積極的に取り入れようとする方向に向かったように思います。彼の方法は、アジアの危機への関心から国内の制度分析に向かうこ

とになりました。対照的に、私はアジア危機を「通貨危機」と捉え、そこからアメリカ、IMF などのワシントン・コンセンサスに基づくグローバリゼーションの政治的側面に関心を移し、先進国、とりわけアメリカの金融資本に好都合なグローバリゼーション、金融の自由化にやりきれない思いを強めました。それが地域主義、地域協力の研究に向かわせることになりました。研究の接近方法としては、野口さんとは逆に世界経済論、国際貿易論の視角からのグローバリゼーションへの批判的接近といえるかもしれません。とにかく、野口さんの論文を読んで、改めて自分の研究関心が彼と異なる方向での軌跡をたどってきたことを自覚させられます。

彼は、次のようにアジア危機説を分類しています。ヘッジファンド説、通貨危機説(自己実現型危機)、金融バブル説、クローニズム、金融自由化説です。そして、彼は、構造主義者とポスト・ケインズ派モデルが主張する金融自由化によって起こったとする解釈に同意し、金融の自由化を危機の決定的原因とみなしています。ちなみに、私は、投入型成長限界説(P.クルーグマン)、アジア型資本主義、制度・組織原因説(この典型はクローニー資本主義非難です)、政策失敗、政策順序失敗説、過剰流動性原因説に分類し、過剰流動性が危機の決定的な原因としました。とにかく、野口さんは、この分析から危機を「制度間摩擦」あるいは「制度摩擦」と捉えるようになります。つまりアングロ・アメリカンとは異なるアジアの制度がグローバリゼーションに組み込まれることになるが、このときに制度的な調整に失敗したことが危機の原因だと理解されるのです。それは「コーディネーション」の失敗と捉えられています。

そして、こうした問題意識の中で、国際的な反グローバリゼーションの共同研究の企画を立てることになります。それが、野口さんを中心に私と新潟大学の佐野誠さんの3人で企画することになった共編著『反グローバリズムの開発経済学』日本評論社です。当初その企画書のタイトルは日本語ではもう1ついい案が出ず検討していくことになりましたが、主旨はワシントン・コンセンサスに対抗する開発論の方向を探ろうというもので、彼が中心となって「開発の政治経済学の復権 Restoring Political Economy of Development」や「市場主導型開発を超えて：開発の政治経済学の新潮流 Beyond Market-driven Development : A New Stream of Political Economy of Development」などのタイトルを考えました。最終的に、本書の日本語タイトルは『反グローバリズムの開発経済学』となりました。執筆陣については彼の言葉を借りると、「学会の長老よりも、中堅どころで意欲的、活動的な人物、しかも非主流を明確に標榜する人物」にしたいというものでした。彼は、新しい課題を自分達で担っていかねばならないと決意していたと思います。そして、この企画をもって2000年の11月ごろだったと思いますが、野口さん、佐野さん、私の3人と日本評論社の飯塚英俊さんの4人で、東京駅の丸の内側改札口で待ち合わせて企画の確認をしました。個人的には、やっとこの本を刊行できて、ほんの少しですが彼の遺志を継ぐことができたかとホッとしています。残されているのは、本書の英語版での刊

行ですが、何とか努力したいと思っております。

さて、野口さんが、アジア金融危機の原因を述べた部分をみますと、次のような叙述が見られます。

「しばしば米国サイドからは、クローニー資本主義と揶揄されるアジア的な『仲間関係』が国内金融機関のリスク評価を誤らせた結果であるとみなされてきた。しかし、この危機において注目しなければならないのは、危機に先立ってタイが、金融と資本取引を外向けに自由化する政策を急激に進めていたことである。これによって、タイの国内金融機関の相互信頼を支えてきた仲間関係は、それとは異質な取引関係から成り立つ国際資本市場と直接接することになった。在来の仲間関係に支えられたタイの商業銀行の甘いリスク評価は、タイの労働者の低賃金とともに、グローバル資本を支えるモジュールのひとつとしてその利殖運動に組み込まれることになったのである。中心部で得られない低賃金労働と高リスク高収益の期待を支えてきたのは新興工業国の独自の制度である。それを資本がその利殖運動のうちへと同化し濫用しようとしたことが、大量の資本をこれらの諸国へ流し込み膨大な不良債権を誘発してしまったのだ。だが国際資本市場における貸し手の側のリスク評価は、投資の急拡大にともない利潤の形成に少しでも異変が起きれば、在来の相互信頼関係を基礎とした新興工業国の借り手側の評価からは、大きく乖離してしまうことになりやすい。経済ファンダメンタルズに際だった悪化はみられなかったにもかかわらず、流入した資本が反転して退去して流出しだしたのは、制度の差異に基づくそうしたリスク評価の大きなずれの発生に起因する。・・・この問題は、代理人問題やモラル・ハザード問題を引き起こす、貸し手・借り手間の情報の非対称性を指摘するだけでは、十分に捉えたことにはならない。アジア金融危機では、貸し手と借り手とは互いに異なる制度の制約のもとで行動し、しかも借り手の側の行動を制約する制度(仲間関係)を、貸し手の側の制度(流動的資本市場)へと無理やり同化させようとしたことが命取りになったのである」(『進化経済学会論集』第5集)

「アジアの各地域に特殊なインフォーマル信用市場(curb market)は、地域特殊的な習慣と中間組織に保管された市場として半ば自生的に形成されたものと考えられる。それを完備された公開市場に照らして cronyism と批判するのは、信用制度の多様性が果たしてきた役割を無視している。」(法政大学比較経済研究所報告、2000年9月)

ここで野口さんは、情報の非対称性論からの説明について「情報の非対称性：その政治経済学的解釈の可能性」という項を設けて次のように述べます。「情報の非対称性は、情報のとらえ方、評価の仕方が、経済主体の立場、地位に制約されて、取引者相互のあいだで異なることに起因するものと考えることによって、政治経済的な再解釈が可能である。貸し手と借り手はその立

場を異にし、しばしばその力関係をも異にする地位にあるということが、情報に対する見方も決定的に変えるのだと思われる」と(同報告、2000年9月)。

この理解を発展させて、野口さんは、最後の論文となる私たちとの共編著で、次のように述べています。

「東アジアの新興工業国では、同族経営型の企業システムが資本蓄積を担い、企業の不足資本は同族と密着した間接金融システムをとおして供給されてきた。…この貸し手・借り手関係の情報の非対称性という主流派経済学の枠組みで解釈してしまうと、リスクの評価の甘い東アジアの借り手は、リスク評価の厳しい国際市場の貸し手の知らないところで、不良投資に走ったというようにみなされる。…だが、現実には起こったことはその逆であった。国際的貸し手は、東アジアの借り手が同族的つながりに基づいて甘いリスク評価で投資することを十分に知った上で、対アジア融資を高リスク高収益の金融資本のひとつとしてその資産運用に組み入れたに過ぎない」。

こうして起こった危機を契機に IMF・世銀は金融システム改革を推し進めるが、その構造改革を「英米型ガバナンスの移入の試み」と捉え、それはしかし、経営に対する投資家による規律付けが厳格であるほど、企業家の関心は短期の利益獲得にとらわれ、継続的で累積的な性格をもつ技能形成にはむかないであろう。したがって、アジアの新興工業国が英米型ガバナンスをそのまま受け入れることは、制度間摩擦の種を新たに持ち込むことになる。だがアジアは国際資本市場へのアクセスを必要としているかぎり、資本家の収益を重視するガバナンスに配慮しないわけにはゆかない。「ここに危機後のアジアのジレンマがある」(野口・平川・佐野編『反グローバリズムの開発経済学』2003年12月、56頁)。同時に、

「金融市場のように一見すると均質に見える市場も、現実には地域の産業発展の歴史的文化的特殊性を反映して地域ごとに異なる制度的特性を持たざるをえない。農業部門の高い比重、中小企業の果たす中心的役割、製造業での技能形成など、脱工業化する先進資本主義諸国とは異なる経済課題を抱えているアジアでは、経済発展への国民の期待が高ければ高いほど、市場リスクに対する堅固さよりも、市場リスクを出来るだけ隔離し、多様な資金需要を満たす金融仲介の安定したネットワークをつくり上げる必要に迫られるであろう。…東アジアは新自由主義と開発主義のはざまにあって、旧来の開発主義を乗り越える新たな道を見出せるであろうか。だが、今のところその見通しについては確たることは言えないのである」(同、57頁)。

野口さんは制度間摩擦の中で翻弄されるアジアが、どのようにアジアの社会に適合的な制度を作り上げていくか、そうした制度の多様性を信じながら、アジアの道をどう模索していくかを問題にしているのです。この課題を解決しようとする気持ちが痛いほど伝わってくるのです。

もちろん、彼が悩むのはその道がアジアの解体や停滞の道であってはならず、発展の道でなければならぬからです。この間は、彼がわれわれに遺した重要な課題となっていると思います。

[3] 野口氏の経済発展論の枠組みと可能性

1 経済発展論の試み

野口眞さんの残された多くの論文、その他の文章を見させて頂ける機会があって初めて知ったのですが、彼は 2001 年に専修大学経済学部にて経済発展論の講義科目の新設を提案しています。一度として教壇に立って講義することなく逝ってしまわれたと、宮寄晃臣先生に教えて頂きました。彼が新設科目を講義するために提出しようとした企画書には彼の業績が挙げられていますが、それを見ると、主著『現代資本主義と有効需要の理論』に続いて、アジアへの最初の旅の成果をまとめた「激変のアジアは何処へ、NIES、中国、日本資本」のほか、「開発理論の現在 その源流から考える」、「戦後世界システムの転換と中心・周辺関係の変容」、「グローバル化する資本主義のジレンマ 世紀転換点から見えてくる 21 世紀の課題」、そして「アジア金融危機と制度間摩擦」、「the Evolution of Japanese Capitalism under Global Competition」等が挙がっています。

講義計画の構成では、経済発展の概念と測定、経済成長と経済発展の諸理論、資本主義経済の発展段階の推移、資本主義発展の多様性、戦後世界の経済発展、経済発展の諸問題、グローバリゼーションと経済発展の 7 つの大項目を立てています。～ については大項目のみですが、以降の項目には小項目が立てられていて、と が 7 つの小項目を、では 3 つの小項目を立てて、項目以降が講義の中心となっています。

彼の枠組みを私なりに考えてみると、彼は資本主義発展史の中で、とりわけ 20 世紀以降の資本主義発展史を経済発展論と捉えて、で主要な先進資本主義国の資本主義を説明した後、からは発展途上国の分析に入り、で現代的課題を検討し、でグローバリゼーションと発展の問題を考えようということだったと思います。

の基点は「ポイントフォア計画と開発」です。アメリカ資本主義の対発展途上国政策としての開発から始めているのです。そして、「ラテンアメリカの開発主義」、「途上国での交易条件の悪化」、「資源ナショナリズムの高揚」と「ラテンアメリカの失われた 10 年」、「東アジアの工業化」、「最貧国の窮乏」と続きます。では、「工業化と脱工業化」、「人口増大と経済発展」、「経済発展と失業および貧困」、「農村と都市」、「教育と経済発展」、「経済発展とジェンダー」、「経済発展と環境問題」を挙げて、現在の主要な問題を論じた後、で「金融自由化と金融危機 - 特にアジア危機」、「企業のグローバル化と経済発展」、最後に「開発のガバナンス - 特に政府の役割」を挙げて講義計画を閉じています。

野口さんは、明らかに現状分析に関心を深め、その世界的な資本主義の構造に眼を向けて、資本主義発展の総論を企画し、その課題を考えていたように思います。そして最後に、グローバル化を検討し、さらにグローバル化の中での発展途上国の経済発展の主体の問題を扱う形で終わるのです。彼の短い概要の終わりの文章は、「豊かな国と貧しい国の経済発展問題が、互いに独立したものではなく、密接に関連した性格をもつことを解き明かす」というものです。重複になりますが、彼の分析枠組みは1国資本主義分析の枠を超えて世界経済を総体として捉え、そこでの発展途上世界の発展の枠組みを探ろうとしていたのだと、私には思われるのです。グローバル化の下での「制度間摩擦」が最後に来るはずでした。しかし、無念にも、彼はそれを一度として教壇に立って講義できなかったのです。

2 野口理論の可能性

アジア経済論で野口眞さんが遺した課題は、端的に言って、グローバル化の中での発展途上地域の発展のあり方はどういうものか、ということだと思います。私たちの共編著は実際、私が最終章で「東アジアと地域主義の展開」を書きました。通貨危機が東アジアにおいて地域主義を高揚させ、地域協力の強化に向かったことに新しい可能性を見ようと思いました。論文を出したときに野口さんと電話で話をしましたが、彼はこうした方向を極めて好意的に評価してくれました。各国経済の枠内での多様性の追求、そしてグローバル化の中での地域主義的な動きが各地域の地域性を反映したものになることは間違いないと思います。もちろん資本主義であることは何の変わりもないでしょうが、しかし、それぞれの社会における意味合いや機能の仕方も異なると思います。

彼は、コーポレートガバナンスなどの国内的な分析に焦点を合わせていきましたが、社会の制御を単純に市場のメカニズムに任せればよい、それを合理化するためのロジックを作り上げようとする学のある方に対して社会や人々の立場に立って反対し、その認識、方法論的な問題を解き明かして行こうとしていたと思います。市場の役割を否定できません。しかし、市場原理主義的な認識とその傲慢さに対して異議を唱えることは、研究を続ける私たちに共通の課題だと思います。彼はそのために、国内外、学派を問わず、そうした思いを持つ人々とネットワークを結び、共同の作業をしようとして、積極的に動き始めていました。その方向を私たちも目指していくしかないと思っています。彼は研究それ自体もそうですが、研究のあり方においても新しい方向を示していた、と私は理解しています。その方向を少しでも前進させるよう努力していきたいと思っています。